

戦後台湾俳句小史（三）
創成期台北俳句会の基本問題
——『台北俳句集』第1集～第6集の
「はじめに」と掲載句

磯 田 一 雄

1. 「台北俳句会」と「台北歌壇」の重複

『戦後台湾俳句小史（二）』で述べたように、台北俳句会は当初独立した俳句結社として創立されたのではなく、台北歌壇の全面的な支援で、つまり歌壇のメンバーが「俳句会にも出席する」という形で成立した。歌壇が毎月第四日曜にあるのなら、新たに第二日曜に俳句会を開く、というように決められていた、という。台北俳句会の会長は、創立以来2016年の逝去まで一貫して黄靈芝であるが、発足当時は特に弟子といえるような人がなく、黄靈芝が句会の開催を呼びかけても、多数がこれに応ずることは期待できなかった。そこで歌壇の主宰で会員への影響力も大きかった呉建堂（歌壇では孤蓬万里の筆名を用いたが、俳句会ではずっと本名で参加していた）が、「俳句もやろう（句会にも出よう）」と呼びかけて俳句の会が始まったと、ある古参会員はいう。

戦前から短歌を嗜んで当時台北歌壇の中心的なメンバーであった巫永福は、「短歌は数年前からからたち台北支部があり、この集いが日を違えて七彩の集いになったことは面白い」と書いている¹⁾。巫によれば「からたち台湾支部の集い」が「台北歌壇」と重なっており、それが「台北俳句会＝七彩台北支部」とも重なっていたのである。また1973年11月、日本の七彩俳句会主宰・東早苗が「第二回世界詩人大会」参加のため再び訪台した時、黄靈芝とともに東を迎えに行った会員の高橋郁子は「私達の句会は歌壇の者と同じ顔振れなのですが」と書いている²⁾。台北俳句会が発足して3年余り経ってもまだそういう状態だった。これは台北俳句会の成立に関して無視できない事実である。つまり、最初期

の台北俳句会の会員はほとんど台北歌壇の会員だったということである（よく「全員」といわれるが、孤蓬万里編『台湾万葉集』（1994年）・『台湾万葉集・続編』（1995年）及び『孤蓬万里半世紀・台湾万葉集補遺付』（1997年）——以下3冊まとめて『台湾万葉集』等と記す——のような台北歌壇関係の文書で確認できない投句者がごく少数いる）。しかも七彩俳句会の支部ではなくなっても、この短歌会との関わりの側面は容易に変わることなく後を引いていた。この事実は台北俳句会の発展とどのように関わっていたらうか。

台北俳句会が『七彩』から独立するのと前後して、1971年10月に『台北俳句集 1』（以後「第1集」と略称する。第2集以下も同じ）が刊行された。この俳句集はその後原則として（若干の遅れはあっても）毎年度ごとに刊行されている。これによって台北俳句会の独立性・自立性が支えられてきたと思われるのだが、初期の台北俳句会の会員がほとんど台北歌壇の会員だったという事実は、創立初期の段階での『台北俳句集』の投句者のほとんどが、『台湾万葉集』等にその名が見られ、その詠んだ歌や経歴が掲載されていることによって具体的に示される。ではどのくらいの割合で両者が重なっているか、(A) 台湾歌壇と関係のある人（『台湾万葉集』等に歌や経歴が収録されている人）及び (B) 関係のない人（『台湾万葉集』等に名前や歌のない人）の投句者数を、試みに第15集まで表にして見ると【資料①】のようになる（『台湾万葉集』等には、経歴が記され、数十首の歌が載っている人と、経歴がなく歌だけで、その歌の数が10首の人、5首の人、1首のみ載っている人がある。これは台北歌壇内での参加度＝活動の程度を示していると思われるので、前者をA、後者をBと符号を付けて区別する）。

【資料①】初期台北俳句会の投句者数一覧表

(A) 台湾歌壇と関係のある人（『台湾万葉集』等に経歴と歌が収録されている人）及び (B) 関係のない人（『台湾万葉集』等に名前や歌のない人）の寄稿者数。*はAのうち経歴は記されていないが10首以上の歌が掲載されている人、#は1～5首の人。

	投句者 A	投句者 B	A + B	A / A + B	発行年月
第1集	23 (* 2 # 1)	2	25	92.0%	1971年10月
第2集	22 (* 4 # 1)	2	24	91.7%	1972年10月
第3集	26 (* 5 # 1)	3	29	89.3%	1974年1月
第4集	24 (* 4 # 1)	4	28	85.7%	1975年1月
第5集	21 (* 4 # 1)	4	25	84.0%	1976年1月

第6集	25 (* 4 # 2)	4	29	86.2%	1977年1月
第7集	27 (* 5 # 1)	3	30	90.0%	1978年2月
第8集	33 (* 8 # 1)	4	37	89.1%	1979年2月
第9集	40 (* 8 # 1)	7	47	85.1%	1980年2月
第10集	49 (* 8 # 2)	8	57	85.9%	1981年4月
第11集	55 (* 11 # 3)	11	66	83.3%	1982年4月
第12集	60 (* 12 # 3)	14	74	81.0%	1983年4月
第13集	50 (* 7 # 1)	15	65	76.9%	1984年7月
第14集	48 (* 7 # 0)	17	65	73.8%	1985年7月
第15集	48 (* 9 # 0)	19	67	71.6%	1986年(推定)

このように、初期の台北俳句会には、台北歌壇系の会員が圧倒的に多かった。会長の黄靈芝自身台北歌壇の会員であった。つまり「台北歌壇なくして台北俳句会無し」という状態で発足したのである。しかもBに分類される人が、純粋に「俳句系」の人だったとは必ずしもいえない。台北歌壇とは関わりがなくても、本来歌人で、日本の短歌結社「からたち」に属し、「からたち台湾支部」の代表を務めていた、というような人もいたからである³⁾。なお第1集の投句者25人中7人が日本人(全員台湾人と結婚した女性)で、28パーセントに相当する。

このように、最初期の台北俳句会は、母体となった七彩俳句会の支部としての関係は切れたものの、会員がほぼ全員台北歌壇の会員であるという点は変りなかったという事は、会員の俳句に対する姿勢にかなり影響したものである。台北歌壇の会員の中には、当然ながら俳句会に参加しない人もいた。短歌・俳句両方とも熱心な会員もいたが、句会には一時参加したものの、俳句にはそれほど興味がもてず、やがて止めてしまった人や、句会参加を止めないで続けてはいたが、「短歌が主・俳句は従」と割り切っていた人もいた。逆に俳句のほうが目白くなって、やがて歌壇を去る会員も現れた。このように徐々に俳句に軸足を移す人が増えていったが、長い間短歌と俳句両方に関わる人が多かった。

【資料①】によれば、第9集のあたりから、歌壇に関係のない(純粋の?)俳人の参加が徐々に増え、歌壇に関係のある俳人の割合は徐々に減少に向かって、第15集(1986年)では7割強になっている。しかし減り方は緩慢で、それから20年後の台北俳句会創立35周年のすぐ後に出た『台北俳句集 36』(2006年)の段階になっても、台湾在住の投句者45名中に、『台湾歌壇四十周年記念誌』(2008年12月)に詠草を出している人が23名いる。ほぼ半数の会員がなお台湾歌壇(2004年に台

北歌壇と改称)との関係を持っていたのである。また少数ながら「たんがら」「コスモス台北支部」のような、他の短歌会に属している俳人もいる⁴⁾。俳句会と歌壇とは徐々に離れていったのだが、俳句と短歌の両方、さらに川柳も詠んでいる、という人が少なくなかったのが台湾のこれまでの俳句事情である。こうした状況は、台北俳句会の活動の内実にどのように関わってきたであろうか。

2. 『台北俳句集』の刊行状況と投句者数の変遷

『台北俳句集』は第1集以来表紙の色のみ変えた同一体裁で、会員の句を各自平等に20句ずつ掲載している。20句に足りない人もたまにいますが、完全な平等主義である。この原則は最近2017年2月刊行の第44集に至るまで基本的に変わっていない。掲載順は姓の字画順なので、王のように字画の少ない人の句が最初に来る。経験や熟達度などによって掲載句数を変えたり、掲載順を前後させたりすることはしていない。会長黄靈芝の句もこの原則に従って、ずっと末尾に近いところに載っていたのだが、第18集から日本の俳句会『燕巢』主宰・羽田岳水の「賛助出詠」の句が冒頭を飾ることになり(第21集・27集は欠)、第22集からは『なると』主宰・福島せいぎの句が岳水の句の次に載るようになったこともあって、第32集からは黄靈芝の句が賛助出詠句の次に置かれるようになった(さらに詳しくいえば、第27集で一度福島せいぎの次に来たのだが、第28集～31集では一旦元の順に戻っている)。

『台北俳句集』は各年度ごとに発行する原則であるが、実際には刊行が遅れることもあって、会発足の1970年から創立四十周年に当たる2010年までの40年間に刊行されたのは第36集(表題は「中華民国95年度」、2009年5月刊行)までである⁵⁾。

【資料②】『台北俳句集』の内容／表題一覧

	投句者数	あとがき	表題または内容の要点	発行年月
第1集	25人	1ページ	ごく短い形式的まえがき	1971年10月
第2集	24	1	ごく短い形式的まえがき	1972年10月
第3集	29	1	芸術への蝸牛の歩み	1974年1月
第4集	28	1	文学作品としての俳句	1975年1月
第5集	25	1	最初の投句批判	1976年1月
第6集	29	3	句の良否の判定例句	1977年1月

第7集	30	7	日本語批判（異言語の句）	1978年2月
第8集	37	10	言語道具論（革命的な句）	1979年2月
第9集	47	3	日本趣味追隨批判（湾俳登場）	1980年2月
第10集	57	5	短歌の半分論（和句での革新）	1981年4月
第11集	66	7	盗作（剽窃）論	1982年4月
第12集	74	4	歌われる詩歌・書かれる詩歌	1983年4月
第13集	65	11	季語論	1984年7月
第14集	65	2	群の遊びとルール	1985年7月
第15集	67	3	十五周年の回想と自省	不明（奥付欠）
第16集	73	5	新旧ちゃんぼん論	1987年8月
第17集	73	4	個性の喪失	1988年8月
第18集	67	6	俳句の前書と句評	1989年8月
第19集	63	30	「自句自解」と「短歌の半分」	1991年3月
第20集	59	15	「俳句歳時記について」	1992年5月
第21集	68	9	日本文化と貧*	1993年2月
第22集	70	38	「ありがた問題のいくつか」*	1994年6月
第23集	65	30	文法論*	1995年10月
第24集	62	27	「台湾歳時記と台湾季語」*	1997年3月
第25集	60	59	「戦後の台湾俳句」*	1998年12月
第26集	59	83	「日本文化の原点」	2000年6月
第27集	65	1	ごく短い「附記」#	2000年12月
第28集	64	2	短い説明的「後記」#	2001年10月
第29集	59	1	ごく短い「後記」#	2002年1月
第30集	54	1	ごく短い「後記」#	2003年6月
第31集	56	1	ごく短い「後記」#	2003年8月
第32集	50	2 + 7	正岡子規国際俳句賞受賞	2005年7月
第33集	48	1	短い形式的「あとがき」	2006年7月
第34集	54	4	解題的「あとがき」	2007年9月
第35集	51	5	断想的「あとがき」	2008年3月
第36集	53	8	回想的「あとがき」	2009年5月
『台北俳句会四十周年記念集』			現会員人の句52ほか	2010年12月
第37集	50	2	短い形式的「あとがき」	2011年9月
第38集	45	3	回想的「あとがき」	2012年4月
第39集	50	2	短い形式的「あとがき」	2012年8月
第41集	40	1	短い形式的「あとがき」	2015年7月
第42集	同	同	同一内容	同
第43集	同	同	同一内容	同
第44集	40	3 + 1	序# + 形式的「あとがき」#	2017年2月

・投句者には刊行前に逝去した故人及び日本人（台湾定住者・一時的滞在者・日本からの投句者）を含む。

・ほかに賛助出詠がある。賛助出詠者は第18—20集に『燕巢』主宰・羽田岳水、第22—38集と『台北俳句会四十周年記念集』に羽田岳水及び『なると』主宰・福島せいぎ、第39集・第44集に福島せいぎ、第41—43集は賛助出詠なし。

・第1—6集は「はじめに」、第7—43集は「あとがき」、第44集は「序にかえて」と「あとがき」がある。

#以外の「はじめに」「あとがき」は黄靈芝が執筆（第1・2集は無署名なので推定）。

*は台湾季語の解説を含む。

・『台北俳句会四十周年記念集』は第40集に相当するとみられる。この記念集は「作品一」（現会員）52人、「作品二」（故人を含む旧会員）104人、「作品三」（一時的関係者）35人の句から成る。

・第41・42・43集は、黄靈芝の「不調法」のため遅延していたが、「台北俳句集編輯委員会」により創立45周年の「内祝い」として一括刊行された。3集ともに投句者も黄靈芝の「あとがき」の内容も全く同一である。

3. 台北俳句会はどのように成長してきたか

——台北俳句集による時期区分

『台北俳句集』はどのように発展してきたのであろうか。まず会の規模（会員数）を投句者数（句会の出席者数ではない）の変遷から辿ってみる。最初のうち、句集への投句者数は30人未満で、発足後第6集までほとんど変わっていない。これが第一期（創成期）の小規模な句会の姿である。

しかし、第7集からは次第に投句者が増えて、第12集で最高（74人）に達する。第16・17集でもともに73人の投句を集めるなど、台北俳句会の発展期であったといえよう。以後第29集までほぼ60人台を保っている。

そこで第7～17集を第二期（発展期）、第18集～29集を第三期（高原期）と分けることにする。発展期の特徴は、第7集以降黄靈芝の「あとがき」の内容が、多様で斬新な俳句論が中心になることと、【資料①】に見られるように、台北歌壇にも属する人が漸減する傾向が現れていることである。同時にこの時期は日本の俳句結社『春燈』の台北支部と、一部の台北俳句会会員との関わりが生まれてきた時期という特徴がある。

いっぽう高原期は投句者数が60人台で、黄靈芝の「あとがき」が次第に俳句論から日本文化論に移行する傾向を見せると同時に、日本の俳句結社『燕巢』との協力において、「台湾季語」を定め、これを季語とする俳句を集めて「台湾俳句歳時記」を編纂するという画期的な作業があった時期である。

2000年代に入ってから投句者数が明らかに漸減傾向にある。第30集から第39集までがほぼ50人台（第38集のみ47人）を保った第四期（成熟期）になる。会員数は漸減するが、2003年に『台湾俳句歳時記』が黄靈芝の著作の形で刊行され、2004年に黄靈芝が「第三回正岡子規

国際俳句賞」を受賞し、2010年に『台北俳句会四十周年記念集』が刊行されるなど、台北俳句会の活動の総決算的な面と同時に、台北俳句会が漸く日本の俳壇でも少しずつ認知されるようになった、いわば「成熟期」である。またここまでが、句会への欠席が目立つようになったものの、会報代りに句会への投句評を出すなど、会長・黄靈芝によって統括された句会活動であったといえよう。

第39集までの『台北俳句集』は、たとえ発行が遅れたとしても、年度ごとに独立して刊行されていた。その3年後第41・42・43集が、表紙の色だけ変えた同じ体裁で、2015年7月同時発行された。投句者は3つの集とも同一で、賛助出詠一人を除くと数も一挙に40人に減っている。また日本在住の比較的新しい会員の投句が増えており、毎月の句会ごとに出されていた、会報代わりの句評もなくなるなど、黄靈芝会長の関与もそれまでよりずっと薄くなっていた。そして刊行の約半年後に句会のカリスマ的存在だった会長・黄靈芝が亡くなっている（2016年3月）。そこで第41集（2015年）以後、というより第39集刊行以後は、第五期（転換期）とすべきであろう。今後どのように転換・発展していくのか注目したい。

以上第39集までの時期を、句集への投句者数と、句集の「はじめに」／「あとがき」の内容などをも参照しながら、次のように仮区分してみることにする。

- 第一期（創成期） 第1～6集 （投句者30人未満、1970～1976年度）
- 第二期（発展期） 第7～17集 （30～70人台、1977～1987年度）
- 第三期（高原期） 第18～29集（ほぼ60人台で安定、1988～2001年度）
- 第四期（成熟期） 第30～39集（50人台で漸減、2002～2011年度）
- 第五期（転換期） 第41集以降（40人台に減少、2012年度以降）

『台北俳句集』の第1～第6集には「はじめに」、第7集以後は「あとがき」がある（ほとんどが黄靈芝の執筆だが一部編集員によるものがある）。初めは短文だったが、第二期以降かなりの長文に変る（標題と長さ（ページ数）については【資料②】（P.63）を参照のこと）。この「はじめに」（第1～6集）や「あとがき」（第7集以後）の内容の変化・発展は、戦後台湾における俳句活動に迫るための重要なてがかりになると

思われる。また第5集から第26集までに書かれた「はじめに」／「あとがき」は、後に『黄靈芝作品集 18』（2000年12月、私家版）としてまとめられており、いわば戦後台湾俳句史論の中核的な資料ともいえるものである。台北俳句会の活動の質的な側面——俳句活動の実態——は、掲載されている会員の句がどのように変化（成長）していったかをみるべきであるが、これに関連して会長・黄靈芝が会員の句会への参加や句集への投句状況をどのように見ていたか、ということからまず検討していきたい。

4. 第一期『台北俳句集』の「はじめに」の論調と掲載句

第一期（創成期）は投句者数が30名未満の時期である。第一期は投句者数は多くないが、メンバーが比較的安定していた時期ともいえよう。また第一期の「はじめに」は、基本的には会長黄靈芝による会員の句作状況の評定が中心になっていると見られる。第一期の台北俳句会のメンバーは、どんな句を詠んでいたのだろうか。「はじめに」における黄靈芝の語り方の変化は、各俳句集に収録されている句とどのように対応していたのだろうか。

まず第一期（第1集～6集）に投句を始めた人の冒頭の句を1句ずつ紹介しよう。特に断らない限り、これらの俳人たちは少なくとも第一期中は投句している。なお第一期には台湾人と結婚した日本人女性（☆印）9人の句があるが、日本人男性の投句はない。

第1集からの投句者の句

医を忘る独りすすろに躑躅の緋	王義雄
春雷や産卵近き鮒太し	辻野房子☆
余寒厳し娘を待たずして逝きし母	北条千鶴子☆（第5集欠詠）
あか紙に福の字しるく年明けぬ	巫永福
土産とて澎湖の貝を子の並べ	李治香☆
紫陽花や花の季節を偽らず	呂鵲城（第5集欠詠）
実のなき言葉小耳に春の星	林妙子☆
明眸に映る晴着や年始め	林昭美☆
夫に痛さとらせまじと藤の花	邱秀琴

喪の家に声なく揺る藤の花	呉建堂
春灯やそぞろ歩きの影長し	施碧霞
春なれど心の重き卒業期	高秀（第4集まで）
薔薇赤し心の痛み深き日に	高愛恵（第1集のみ）
民国六十年祝ふ花火に子等の関	高橋郁子☆
春の夜や眉の濃淡意に添はず	陳秀喜（第1集のみ）
枝越しに見ゆる青空桃の花	陳金定（第2集欠詠）
五月雨や孫の手を欲る五十肩	陳阿嬌
新年の感慨深し日記書く	郭水潭
灯を寄せて文読み返す春の宵	曉蘭（第2集より陳蘭美を併記）
グラス越し笑み酌み交す春の宴	張清瑛
初日の出久遠に大地照らすなり	都雅代☆
旭に蜂を放ちて牧の朝始む	黄靈芝
旅行バス走り走りて春又春	頼武揚
春めくや児等の歌声はつらつと	蕭秀紅
角々に爆竹響く初日かな	蕭慶賢
第2集からの投句者の句	
竜宮に似る梨山の旅社の夏知らず	王玖
有明の鴨群れ鳴きて煙火立つ	香山京月（陳彩瓊）☆
百年の英国旗降しつつ咲く（淡水英国領事館閉館）	頼天河
第3集からの投句者	
初暦かけて集まる子らの顔	河口七五三江（葉七五三江）☆
蝶一つ重たげに飛ぶ風の中	陳雲程（第4集まで）
寒流に犬震へつつ宿さがし	顔碧仙
第4集からの投句者	
アルバムの記憶に遊ぶ夜の長し	林叢
第5集からの投句者	
贈られし楓一葉新潟より	蔡華山
第6集からの投句者	
晴着きてしばらく老いを忘れけり	陳綱
国思ふとび発つ飛機の夕焼雲	莊月蛾
初孫やここまでお出で春うらら	羅素真

第一期の台北俳句集の「はじめに」の論調と句を見てみよう。まず一般会員の句を先に見て、長老・先輩級の同人（会長黄靈芝ほか巫永福・郭水潭・呉建堂など）の句は、後にまとめることにする。最初に第何集まで投句していたか、次いで判明する限り生年と没年を示す。また一般会員は数が多いので代表者の句のみ、第1・2集、第3・4集、第5・6集に分けて見ることにする。

5. 第1集・第2集の「はじめに」と掲載句

第1集は七彩台北支部と重なっていた時期であり、『七彩』に掲載された句がかなり載っている。したがって、句のレベルはある程度保たれていたのではないと思われる。第3集までの「はじめに」はわずか4～5行の短文で内容もごく簡単である。特に第1集の「はじめに」は以下のごく形式的な文言しか載せていない。句会の原則を述べるだけで、会員の句には言及していない。なお第1・2集の「はじめに」は執筆者名がないが、一応黄靈芝の筆と推定される。第3集以降は黄靈芝の名がある。

この句集は台北俳句会発足一年の句を集めたものである。

台北俳句会は流派にこだわらず、個性を重んじ、純粋に俳句を愛する人達の集りである。

私達はこの種の句集を年に一度編纂する。

この「流派にこだわらず、個性を重んじ、純粋に俳句を愛する人達の集り」という句会の原則は、『七彩』によって支配されたくないという思いの表出かも知れない。『七彩』に載せられる句の選句はすべて主宰の東早苗任せであるから。これは選句や句評にとらわれず、「下手でもよいから、自分の句を詠め」という意味にも取れそうである。しかし黄靈芝の本心では「流派」にこだわらぬ「個性」と「愛」だけの俳句に満足できなかったのではないか、ということが次第に判明するようになる。

第2集の「はじめに」も以下のように簡単である。

これは同人の自選第二句集である。

私たちの俳句年令は稚なく拙ない句も多いが、それとて一つの過程を記録するものとして収録した。

共にこの集の上梓を喜びたい。

第2集は七彩俳句会のしがらみを脱した最初の句集である。この第2集は、全期を通じては最も少ない24人の投句になっている。いっぽうこの集から雅号ないし別名（多くは日本名と台湾名の併記）を記す人が出てきている。また『七彩』から離れて自立したので、第2集には『七彩』に載った句がずっと少なくなっている。「拙い句も多い」が敢えて収録したと遠慮がちに述べているのは、そのこととも関係があるのかもしれない。第1集と比べてみると第2集の方が全体として若干冴えない感じがする。東早苗歓迎句会に参加し、歌集『斗室』を刊行（1970年）、戦後台湾随一の女流詩人となる陳秀喜は、1971年笠詩社長になると早くも止めてしまったし、郭水潭と陳金定も欠詠している。わずかに新入りの頼天河が活気を添えている程度である。こうしたことを黄靈芝は気にしていたのであろうか。以後第6集まで黄靈芝は句集に収録された句のレベルの問題をつねに意識しながら「はじめに」を書いている。

5-1) 第1集・第2集の掲載句：曉蘭（陳蘭美）

台北俳句会の創立から黄靈芝の没するまで一貫して参加した、曉蘭（本名：陳蘭美）・張清瑛（雅号：白圭）・北条千鶴子（中国名：范友佳）の3人の女性俳人がいる。第1・2集の台湾女性俳人の句は、曉蘭を例にとろう（第2集からは「曉蘭（陳蘭美）」と本名を併記している。その後本名を先に書くようになったので、第2集からの投句者と誤認されることがある）。彼女は第44集までのすべての台北俳句集に投句している。1928年生れ。『台湾万葉集・続編』の編者・孤蓬万里は「つねに禁断の実を求めてやまない燃ゆる性を内に秘めつつ、理性によってそれをからくも抑え忍んでいる、といったような情熱の女流歌人の一人である」といつている。例えば、

燃ゆるとも炎の白き白バラよ灼熱の愛^{かた}互みに秘めて
口づけのごとも……眼閉ち^マ齒^マを入るる君が齒型の残るリングに

のような歌を詠んでいる⁶⁾。俳句にもそれが出ているように思われる。中には「冬の灯に昔を語る老夫婦」のような平易な句もあるが、内容の濃い華やかな句が多く、与謝野晶子の俳句版のようなどころがある（因みに第5集には「晶子にも貞女にもなれず火を焚きぬ」という句がある）。

憂き心風に流して藤とあり（『七彩』では下五「藤の房」）
薔薇切りて告げ得ぬ心壺に入れ
口づけを受けむ形に紅椿
貝のごと脆きを秘めて女生く（以上第1集）
もう一人のわたし覗かすカンナの緋
切り出せぬ用談胸に金魚ほめ
別れ来て剥く柿皮のつながらず
寝ね難き枕の下を蚯蚓鳴く（以上第2集）

これ以後もやはり深い情念を秘めたような句が多い。

5-2) 第1集・第2集の掲載句：王義雄

第1集から第18集まで投句。『台湾万葉集』に5首掲載、経歴の記載はないが、句から医者であることがわかる。第三期に入ると間もなく会を去っている。文芸家ではない初期の一般会員の事例。全体としてリズムが重く、漢詩調の句が多い。

夕星もレーダーも点滅の夏の宵
ビール冷えし食堂車忙医の閑
追憶は蛍を追ひし京の日々
郵便夫袋たわわに年の暮

王義雄は第2集以後「水郷」という俳号を併記している。第2集の句は人柄を表すような、固い、きまじめな印象がある。生活の臭いのする率直な句が多い。

聖書を絆の睦や異郷の夏

砂漠越して汗ほこり拭く他郷の宿
露座仏の遙けき丘や「餐車」に菊
青田風ローカル線の荷潮臭き

『台湾万葉集』に紹介された5首には次のような歌がある。

門松の君が国をば懐しむ爆竹爆ぜる蓬莱に住み
あどけなき子ら傍らに戯れ居命迫れる友を見舞へば

5-(3) 第1集・第2集の掲載句：高橋郁子

台北俳句会では戦前から台湾に滞在していた日本人女性（ほとんどが台湾人と結婚している）が重要な位置を占めている。辻野房子・北条千鶴子・李治香（佐々木はる子）・林妙子（林妙）・林昭美・高橋郁子・都雅代（何千珠）の7人が第1集から投句している。第2集から香山京月（陳彩瓊）、第3集から河口七五三江（葉七五三江）が加わった。高橋郁子は1970年の『七彩』主宰・東早苗の台南旅行に黄靈芝と共に同行し、『七彩』台北支部～台北俳句会の発足に関わった重要人物で、また多くの知人を台北歌壇や台北俳句会に紹介した功労者でもある。歌は理知的で達者な詠みぶりである。

虫と見て踏まれし豌豆床の上を転びつつ「眼鏡駈けよ」と笑ふ
人生の縮図見るとと墓婚車左右に並び信号を待つ
蛇口より引く水音と知らずして啜り泣くのはだれかと探す

1911年兵庫県生まれ、父は俳人。中国人鮑氏と結婚、南京より戦後台北に移住。1965年コスモス入会、「からたち」台北支部を作り、「台北歌壇」創刊以来の幹部。1990年日本に戻る⁷⁾。『台北俳句集』には第1集より第19集を除き第22集まで投句。第1集は「民国」「赤嵌楼」「相思樹」（「花」が付くと台湾季語になる）など、台湾を思わせる穏やかな句が多い（以下「台湾季語」と思われる語には*を付すことにする。これらの語は黄靈芝編著『台湾俳句歳時記』（言叢社、2003年）に収録されている）。

民国六十年祝ふ花火に子等の関
母の日や娘に祝はるる派手な柄
傘に陽を避けつつ登る赤嵌楼
相思樹林落葉に肥えて寒に燃ゆ

第2集は人事句9句。生活記録的な句が多い。

鷺一羽蕃社へ続く谷渡る
爆竹*の戸毎に響く新天地（旧正月）
基地の桜花^{はな}見せむと駈くる娘の自動車^{くるま}
主婦の座を嫁にゆづりて夜食する

5-4) 第1集・第2集の掲載句：蕭慶賢

1929年台中州大甲生れ。当時最若年の会員だったが、1974年病没、
投句は第3集で終る。小学校時代に担任の指導により短歌に出逢い、台
北歌壇誕生のきっかけともなった1965年呉振蘭の皇室歌会始入選の記
事に刺激され作歌を開始し、甲府市の「美知思波」、次いで「からたち」
に参加。『台北歌壇』と『台北短歌集』は最初から参加し、死に至るま
で続けたという。この間『金の卵』（1968年10月）、『銀翼』（1971年4
月）、『銅像』（1973年12月）の3冊の歌集を刊行した意欲的な歌人であ
った⁸⁾。黄靈芝は第3集の「はじめに」で「昨年の後半期に最も年若
い蕭慶賢さんが癌で倒れ、今年の一二月二十六日にみまかった。口惜しき
こと筆舌に盡くし得るものではない」と悼んでいる。第3集の句まで見
てみよう（第1集第一句の「爆竹」はこの句では季語として機能してい
ない）。

門々に爆竹響く初日かな
自慢せし春灯焼けて喚く子等
教師節*大成殿は賑はへり
捨て売りの師走の夜店客絶えず（以上第1集）
元日や古着でかせぐ靴みがき
菖蒲湯を沸かして子等の帰り待つ

田舎駅はだしの売り子荷の重し
忘年会匙を鳴らして浪花節（以上第2集）

第3集の句ものびのびと詠んでいて、逝去直前の作というような暗さは全く感じさせない。

鮮やかに群咲く野菊祖父の墓
踊りつつ杯交す年忘れ
粽蒸す香り流るる里のどか
黄泉も賑ひてゐむ清明節*

こうして見るとそれこそ巧拙を問わず、みな実に個性豊かで生き生きと詠んでいる。蕭慶賢のように惜しくも短い参加で終わった人もいるが、台北俳句会に長く投句した人のほとんどが『台湾万葉集』で歌歴を紹介されている。ということは台北俳句会に入ってから、この先長期にわたって短歌をも詠み続けたということである。いかに生活表現への意欲に満ちた人たちが句会に参加していたかが分る。同時に短歌への関わり方が、俳句の表現にも現れてくる可能性があったと思われる。そういうことを念頭に置きながら、台北俳句会の俳句の発展状況を見て行く必要があるだろう。

6. 第3集・第4集の「はじめに」と掲載句

第3集にはもはや『七彩』に掲載された句はない。この集は第一期で第6集と並んで一番多い29人の投句になっているが、一人は早くも逝去した会員・蕭慶賢の前掲の遺作である。第3集からはこれまで無署名だった「はじめに」に黄靈芝の名が入る。少しずつ会長の存在感を増しつつあるという感じがする。彼は短くこういう。

中華民国六十二年度の俳句をここに纏めた。同好の私たちが、よしんば蝸牛の歩みであったとしても、着実に、芸術の階を登りつつあるこ〔と〕は喜ぶに堪えよう。……

出来はともあれ句作の姿勢の着実さだけは認めているかに見える。しかし「芸術の階を登りつつある」という言い方は、俳句会の3年間の歩みに一定の成果のあったことを自負しているようにも、会員に句作はお遊びではなく真剣勝負だ、「芸術の階」を登る苦行なのだと自覚させようとしているかにも見える。趣味としての域を超えた要求である。

第4集は投句者28人。第3集までの「はじめに」はごく簡単だったが、第4集の「はじめに」は1ページ足らずながら、少し具体的な内容が出て来る（下線引用者）。

民国六十三年度の自選俳句集を上梓する。昨年は石油問題から世界的な経済動乱に見舞われ、大変な年であったが、当地の俳壇としては実りの多い年であったと思う。句に限らず創作する場合、知らず知らずのうちに読者を念頭に浮べることが多いが、読者よりも己を欺かざることが大切であろう。私たちにあって俳句とは、それが日本人に通ずるか否かは問題ではない。文学作品たりうるかどうかは問題なのである。その点数人の句友が頭角を顕わしてきたことは嬉しいことである。……

これは日本人の基準に合わなくても（日本語で詠まれた俳句が）文学作品たりうる、ということ、つまり「日本文学」ではなく「日本語文学」として認められるような作品を詠めということであろう。これは4年経ってようやく俳句の質が向上してきたこと、そしてその基準を日本にとらない（言い換えれば「台湾的アイデンティティ」を目指す）ということを示しており、台北俳句会の存在意義の最初の実質的な確認である。

もっともこれは、あるいは『七彩』を意識しての発言かもしれない。というのはこの頃（第4集が刊行された1975年ころ）になっても、2年ほどの中断を経て『七彩』に投句ないし投稿していた会員が少数いたからである（例えば1975年3月号の高橋郁子・林妙子、1977年6月号の林妙子など）。

ともかく、ここまでは一応「順調に」俳句会が成長してきたようである。だが「文学作品たりうる」とはどういうことか、「数人の句友」とは誰のことかなどは明確でない。逆に言えば他の多くの作者の句は「文

学作品」の域に達していないという意味にもなるだろう。

6- (1) 第3集・第4集の掲載句：張清瑛

第1集より第44集まで全句集投句。1924年台北生れ。父が外交官で戦前期日本・華北・満洲と転々し、長春の敷島高女卒、女子高等師範に進んだが、父の死により台北に戻り放送局のアナウンサーになったという経歴の持ち主である。1968年蕭慶賢の紹介で台北歌壇に参加、次いで夫も入り歌壇唯一の鴛鴦歌人となっている。張の短歌は素直で飾らないが、推敲を重ねる努力型でもあるとされている⁹⁾。俳句にもその傾向が見て取れるように思われる。第3集・第4集とも素朴な写生句で、歌人の面影を髣髴させる。

菜を切る手はたと停まりし蟬時雨
雉猟の写真入選に犬を撫で
合歡かほる河のほとりの夜釣人
銃かつぎ鹿谷に来て紅葉狩る（以上第3集）
石けりてボーナス減りし理由^{わけ}をねる
我が手紙増えて知りたり母の日を
鳩風船空まで高き国慶日*
石獣の並ぶ北稜柳絮とぶ（以上第4集）

6- (2) 第3集・第4集の掲載句：北条千鶴子

第1集から第44集まで投句（第5集及び第9～13集は休詠）。1929年阿波池田生れ。中国名：范友佳。途中仕事の関係で一時期の休詠はあるが、創立時から今日まで（2017年現在）参加している唯一の日本人女性である¹⁰⁾。短歌が主で俳句は従と割り切って台北俳句会に参加したというだけあって、優れた歌を詠んでいる。次の第1首は『コスモス』の入選歌である。

織のごとく車両行き交ふ十字路に秋あかね飛ぶ身をはしつづ
客のごと母に在せる兄の家に里帰り来るは哀しみに似る
女らの哀れは今も変りなし三従の教へ尚生きつづく

第3集は力強い、生活と対決姿勢の感じられる句が多い。短歌的だが風格のある句になっている。

初暦いかなる日々の待ちてみむ
苗立てて労農今年もやる覚悟
原爆忌孤児生き抜きて父母となり
子と我の断層深し寒の月

第4集は生活を見つめている句が多い。対決というよりゆとりが出て来た感じがする。

鋤のあと冬眠の蛙ふためきて
鉢の木の小さき芽吹きに予後のよし
麻蚊帳を釣りし思ひ出遠き雷
南画ありピカソもありて暦売り

6- (3) 第3・4集の掲載句：呂鵲城（本名：呂生地）。

『台湾万葉集・続編』に呂の歌が5首掲載されているが、歌歴の記載がない。台北俳句会では、戦前期に一番俳句の経験を積んだ人ではないかと思われる。台中商業卒。同校の国語教師で、『竹鷄』の主宰・阿川燕城の一番弟子といわれ、俳号は師燕城の一字を貰ったという。戦前期に既に俳人として活動しており、「奉公俳句」に投句し掲載された経験がある¹¹⁾。歌人としてよりむしろ俳人として活動した人である。人事詠の多い台湾句の中で彼の句は花鳥諷詠が多く、この点でも一応日本俳句の伝統を受け継いでいるといえよう。第20集（1992年5月）まで参加（第21集・22集に遺稿）して、台北俳句会がいよいよ最盛期に達するのを見届けて逝った幸福な人である。

最初に呂の詠んだ短歌を見ると、何か人生を諦観しているような感じが伝わってくる。

今年より家計一切二代目に譲り短歌に親しみゆかむ
山越えて逍遥ふ雲の行く末を都市に飽きたる人ら来て追ふ

わが逃げば読む者なからむ日文書懇ろに干し柵に戻しぬ

俳句にもどこか諦観を感じさせるものがある。第1集の「蕃山を沈めて夏の一湖あり」や「虫鳴きて山廟そこに昏れんとす」、第2集の「音もなく流るる星を追ふ旅愁」、また「あまたなる御魂今なき雲の塔」「たたかひは遠く紺なる夏の海」のような戦中懐古の句などがそれである。第1集には『七彩』に採られた「紫陽花や花の季節を偽らず」「行く春や落暉野染めてただならず」など多少いい句もあるのだが、その後があまり振るわなかったようである。

第3集は冴えない沈鬱な感じのする句が多い。

捕虫網かざして童の日曜日
若き日の思ひ出多しすき焼す
習はしと補冬*などして老いにけり
かまど猫貧しき主によくなつき

第4集も病気のせいであろうか若干物足りない句が多い。

しだれ柳吹く風つよし脈乱れ（病氣入院中）
命ありて風の蓮華にわが向ふ
銭借りに菊をほめたる性いやし

第5集は休詠している（病気のためではないかと思われる）。第6集を見ても、戦前から俳句をしていた人にしては句が弱いように思われる。第4句など自分自身を詠んでいるような感じである。

初春や雨静かなる山中湖
龍年の冬至団子を孫と食ふ
蓮池の枯れて仕舞ひし広さかな
疲れ脱ぐ服にたまりし冬埃

6-(4) 第3集・第4集の掲載句：頼天河

第2集から第29集まで（第28集・29集は遺作）。1923年生れ、2001年没。呂鶺城と同じく台中商業卒業で、始め川柳に興味をもったが、同校の国語教師で『竹鷄』主宰の阿川燕城により「俳句もやらされた」という¹²⁾。短歌は戦中期から『あらたま』に詠草を寄せており、戦後は台北歌壇に参加したのは勿論、1980年春燈俳句会の支部である台北春燈句会（現・春燈台北句会）の発足とともに参加し、三代目代表を務めている。また1994年発足の台北川柳会（現・台湾川柳会）の初代会長にもなった多彩な人である。

初投句の第2集からユニークさが目立つ。川柳的な句が多いが、時にエスプリのある句も。第1句は台湾が国際的に孤立する時の覚悟を反映している。こうした着眼は呉建堂にも通ずるものがあるろう。

百年の英国旗降しつつ咲く（淡水英国領事館閉鎖）
喪章のピン下着貫く薄着かな
蜜豆を妻は父子反比例の量
日付け換へ手紙遅らす万愚節

第3集は人事句13句。やはり川柳的な句が多いが、身の些事を詠んだ句が多く、第2集の句のような華やかさが無い。

釘の位置わが意を得たり初暦
パラソルの角度意識し女熟れ
炎昼の余熱に麻雀負けて来る
長き夜や子は縁談を聞き入れず

第4集は黄靈芝の言う「頭角を現して」きたうちの一人かもしれない、と思わせるような句がある。

承諾でやうやく解きぬ懐手
反芻を牛忘れしか春の草
食客は身内を混ぜて媽祖祭り*

洗ひ髪受話器を遠く持ちて切り
十二月八日捨てて悔いなき古手紙

第5集・第6集の句も、自由奔放で分かりやすい。言葉に無駄がなく、ユーモア感もたっぷりある。

ひと山をこぼしつづ買ふ藁の身
悪女の多情に似て夏果てず
とどめなき女の愚痴に柳散る（以上第5集）
相思樹の花や才なき妻いとし
母の日に陪賓の父飲みまくり
暖房に遅れがちなる大時計（以上第6集）

なお頼には次のような「ユーモアをきかせた歌」が多いという¹³⁾。これは川柳にも通ずるであろう。

バスの中席を譲られ我老いしと思へどその人降りる為なりき
珈琲と紅茶と向き合ひ聞き流す妻のねだりを否む術なく
曾てわれ汽車をせがみて叩かれし今レール組む孫を手伝ふ

7. 第5集・第6集の「はじめに」と掲載句

第5集の「はじめに」は、1ページを少しはみ出して、これまでより長くなっているばかりか、第4集とは逆に、初めて会員の俳句に苦言を呈しているのが注目される。

昨年度の俳句をここに纏めた。振り返ってみて、いささかマンネリズムの危険を覚える。語呂に甘えただけでは詩にならないし、十七音で独立した一句を成さねば俳句とは云えないだろう。更に幾語かを加えて短歌や自由詩に仕立て直せるものは、俳句としては表現不足である。

詩人とは、ちょうど指物師が刃物を研いでおくように、終始、神経

を尖らせておく必要があるだろう。

詩は睫毛の先で捕えることが出来る、と思う。それを文字に仕立てるのは、厄介だが期待していい仕事なのである。とまれ、一年に二十句だけでも良い句を残したいというのが、わたしたちの念願だった。お互いに節を曲げまい、と改めて念じたいものだ。

句作の原則を述べているだけで、事例となるような句は挙げていないが、第5集を第4集と比べてみると、全体としてレベルが下がったとまではいえないにしても、上がっていないことは事実であろう。黄靈芝が危機感を抱いたのは、一つには投句者数の減少があると思われる。第3集29名、第4集28名だったのが、第5集は25名とまた振出しに戻っている。第4集で新しく入った人は期待できそうだったのに早くも去り、以前からいた二人も去っている。中堅どころの呂鵲城と北条千鶴子がこの集は休詠している上、新しく入った人は余り期待できそうにない。それで投句者が差引3人減った上、文芸家の巫永福と郭水潭もあまりいい句を出していない。頼天河と呉建堂は健詠しているが、ともに短歌的ないし川柳的なところがあり、黄靈芝の好みとは離れている、という状況であった。

だが、黄靈芝の指摘は全員平等に当てはまるのであろうか。いやしくも俳句をする以上はみな詩人だ、「芸術の階」を登り「文学作品」の名に値する句を詠むのだ、というのはその通りだろうが、すべての会員がそういう明確な自覚を持っていたかどうか。実際この俳句集の句にはかなり会員により差があるのは事実であり、十把ひとからげに論じられないのではないかとと思われる。

もともと台北歌壇も台北俳句会も、台湾社会で孤立した「日本語人」の社交の場であり、その上子どもが成人して去ったり、夫や姑などを失ったりして、心に空白が生まれるとともに時間に余裕が出来たような女性が入会するようなことが多かった。やるせない自己の心情の表現と歌友や句友との交わりを楽しむことが大きな目的だった。そういう人に「詩人」を目指せとか、「終始、神経を尖らせておけ」ということがどれだけ訴える力があつたろうか。黄靈芝の焦燥感と会員の期待とははかなりずれがあつたのではないかとも考えられる。

その一方で、これだけ会員の句に批判的ならば、実際の句会ではどん

な指摘や批評を具体的に指摘していたのかということ、これと矛盾するような、理解に苦しむ証言がある。創立以来からのある古い会員によれば、「黄靈芝先生は、遠慮深く、いくら頼んでも句について意見を言ってくれませんでした」というのである。同じような意見を他の古い会員からもよく聞く。台北歌壇の主宰・呉建堂は会員の詠んだ歌に遠慮なく朱を入れたというが、黄靈芝はそれとは対照的に「物静かな感じ」で、句会で会員の句を積極的に「指導」しようとはしなかったというのである。特に第一期・第二期のころはその傾向が強かったようである。これは俳句集の「はじめに」の論調が、会員の投句から具体例を挙げて批判するのではなく、一般論に終始していることと符合するかもしれない（それに対して、第四期くらいになると、句会での投句を論評するようになる）。

第一期から第三期にかけての台北俳句会には、郭水潭・呂鵲城・頼天河・巫永福など戦前から短歌や俳句に携わっていた「先輩たち」がいたし、台北俳句会の創設に力のあった呉建堂も戦前から短歌を作っていた。郭水潭は第一期だけで、比較的早く台北俳句会を去っているが、こういう「先輩」たちに「遠慮」していたので、具体的な句評をしにくかった、という事情があったのかもしれない。

第6集では投句者が29人に回復する。これは第5集で休詠した呂鵲城と北条千鶴子が投句再開、一人休詠したが、新しい投句者が3人加わったためである。これに対応したのか、「はじめに」が3頁とやや拡大され、初めて俳句を引用して、具体的な俳句論らしくなっているのが注目される。長くなるが全文を引こう。

弱年より俳句が好きだったとはいえ、正直に言って、私には句の良否がよくわからなかった。それがたまたま子規の「随問随答」に次のような一章を見つけた。

ある人問うて曰く、左の句のうち、いずれが物になり候や。
人を見て吠ゆる犬あり桃の里
人を見て犬吠え出すや桃の里
桃の村見知らぬ人に犬吠ゆる

原著が手許にないので、記憶に多少誤りがあるかも知れないが、大

体こういった質問であった。当初、これを読んだ時、私は一番はじめの「人を見て」が語呂もよく、まとまりもいいので、これが良いに違いないと思った。しかるに子規の答えはこうだった。

いずれも句になっていない。

そして、

^{あきんど}商人を吠ゆる犬あり桃の里 燕村

とすればよろしからん、

と結んであった。

この時、私は殆ど戦慄するほどの啓示を覚えた。すでに三十年近く経った今でさえ、その日の戦慄を鮮やかに覚えている。

ところで、現在の俳壇を見まわしてみると、日々に生産される膨大な数の俳句が、ほとんど「人を見て」の域にとどまっていることに、誰でも気づくだろう。それらが虚子の『花鳥諷詠』によって齎された「普及」のかげで、人知れず育まれた「墮落」でなかったかどうかは別問題としても、ここには中国明代の山水画が、文人という知識人の手に委ねられたがゆえに、墮落の道を辿ったことと、期を一にしていそうに私には思われる。とにかく、これは日が経てば、やがては屑籠に捨て去られる運命のものである。お互いに心したいことだと思う。

『台北俳句集』の「はじめに」や「あとがき」の中で、これは最も具体的で分かりやすい例であろう。黄靈芝は説明していないが、「人」を「商人」と変えるだけで句のイメージがずっと具体的になるということだろう。辺鄙な桃の里の犬は見知らぬものに吠えるので、人を見たら誰にでも吠えるのではない。犬にとって「商人」は明らかに見知らぬ胡散臭い奴に映る。だから「見知らぬ」と断る必要はないし、また「見て吠える」に決まっているから、「見て」も不要である。これで具体的なイメージが生まれ句が引き締まる。

第5集から第6集への流れを見ると、一般会員の生活詠の状況はほとんど変わっていない。卑近な事柄を短歌的というよりは短文的に切り取ったような句が多い。必然的に黄靈芝のいう「俳句になっていない」「日が経てば、やがては屑籠に捨て去られる運命」の句が大部分だということになろう。第6集の「はじめに」は、第5集に始まった会員の句

に対する黄靈芝の批判的な姿勢が、一段と具体化したともいえるのであるが、同時にこれまでは曲りなりにも会員の句の批評を前提として論じていたのに、それを離れて一般的な俳句の原理論になっていく方向性をも示している。その意味では第二期への転向点とも見られる。

このように黄靈芝は第5集・第6集になると、会員の句がその要求水準に達していないことを、はっきりと宣言するに至ったのである。句としての質の高さが必要だとの思いは、第5集の「はじめに」に具体的に現れているが、第6集ではさらに、俳句の名に値する（＝句になっている）ためには、どういう句でなくてはならないか、具体的に例示したのである。

7-1) 第5集・第6集の掲載句：施碧霞（玉霜）

第1集から第17・18集を除き第31集まで投句。1916年台北生れ。6歳で渡日、京都で錦林小学校から精華高女1933年卒、間もなく台湾に戻る。結婚後再び渡日、戦後台湾に戻る。生け花の同僚の陳金定の紹介で台北歌壇に参加したという¹⁴⁾。慎ましく生活を見つめた歌を詠んでいる。

ひねもすの子守りに疲れ仰ぐ壁マリア像笑む五月の夕べ
衰えし頭脳と体鍛へむと日々を短歌に俳句にヨガに
のびちぢみ進む毛虫を竹もちてつつくわが孫怖気もなしに

俳句も言葉はこなれている。「サボテン」「月来香」「榕樹」などを台湾季語としてではなく、台湾風景を描くのに生かしている一方「おでん(屋)」も登場する多様さである。やはり短歌的な句が多いように思われる。第5集は全18句で、生活を丹念に見つめているが、短歌というより短文の一部を切り取ったような句が多い。

春聯*の「大家恭禧」雨に濡れ
音たてて棗をかちる小さき歯
五月雨や身の上語る一つ傘
紫陽花の折れし花首いたづら孫

第6集は全20句中人事句が14句とやや多い方。全体としておだやかで、時にユーモラスな生活句、ということは短歌もそうだが、いかにも台湾らしいということか。十七音で自分の心に適うことを句にしている。第一句など短歌的というより短文的で、このように詠めばいくらでも句ができそうである。

蜘蛛あわて太鼓を残し逃げてゆく
帰り来て雷雨に周章で鍵あかぬ
極柑*をゆっくり剥いて見合ひする
相思樹の花*見上げつつ親憶ふ

7-(2) 第5集・第6集の句：陳金定

第2集・8集・9集を除き、第11集まで投句。1923年雲林県生れ。1968年生け花・池坊の教授免許を取得し、同年台北歌壇参加。入会まで作歌経験がなかったという。施碧霞の生け花の同僚で、こんな歌を詠んでいる¹⁵⁾。

わがバースデー夜に入りて思ひ出し寡黙なる夫は買ひ来ぬリングを
二つ
若きらの荒らして散りし渚辺に嘆きのごともどよめく潮
歌を詠むつながり持ちてひそやかに再会期する楽しみ抱く

第5集の句は人事句が16句と多く、地道な生活派という感じの句だが、短歌の一部のような感じは否めない。

春泥や喪主はいまだ幼なかり
爽やかにわだかまり解け空仰ぐ
嗅いで見る故里の玉蘭母は亡し
年の市あれこれほしいものばかり

第6集はやはりおだやかな生活詠が多いが、これまで乏しかった自然詠が出てきた。しかし短歌にしたほうがいいような句が多い。この人は

第11集まで投句して、会を抜けているが、やはり短歌の方が合っていたのかもしれない。

春愁や別れの酒を余さずに
しゃぼん玉一つ一つに空のあり
飯ぬきて極柑ばかりのつはり嫁
屑拾ひの悲哀深まる師走風

7- (3) 第5・6集の句：辻野房子

第1集から第14集まで投句。「からたち」所属で、台北歌壇に所属しなかった稀少な歌人。参考までに第1集～第3集のあらままと、第4集から第6集までの句を通して見ることにする。

第1集から軽やかで俳句らしい感じがする。さらりとした詠み振りが目立つ。生活感覚の感じられる句が多い。第2集には「背徳の肝を冷やして流れ星」「聞き分けぬ不倫の友の白き靴」などハッとするような句もある。「三十年おでんを好まぬ夫に添ふ」も台湾での日本人妻の悲哀であろう。第3集の句も詠み方は相変わらず軽いが、主題は必ずしも軽くない。その裏には生々しい生活現実が息づいている。「血の歴史濃く秘め霧社の山笑ふ」「嫁いびりされて覚えし粽巻く」「鹿肉を強いる驟雨の山の茶屋」など。

第4集にも生活感の溢れる句が多い。日本に旅行した時の句に混じって、媽祖まつり・バンザクロ・愛玉・城隍祭などの台湾季語句がある。後に『台湾俳句歳時記』にまで発展する台湾季語は、こうした会員の句作の集積から生まれたものである。

発財の悲願をかけて媽祖まつり*
欠席の目立つ授業や城隍祭*

第5集に収録された句には生活の臭いの滲む句が多い。やはり「文学作品」としてより、「生活記録」としての俳句というべきであろう。

予算立て孫に揃へる祝儀袋

倒産の友送り出す寒の月
蟹に杯重ねて頼む娘の縁談
月見餅届けて居坐る長話

第6集になって句の付きが多少よくなったようである。鳳凰木・金針花・相思樹など台湾季語の詠み込まれた句も多く、台湾俳人として着実に成長しつつあるように見える。

相思樹の花*咲くを待つ配当期
鳳凰木*の下に集へる小商ひ
アミ族の谷を埋め咲く金針花*

こうして見ると技巧的にはともかく、確実に生活を捉えて詠んでいるように思われる。辻野に限らず、台北俳句集を通してみると、台北俳句会の会員のほとんどが、第一に日々の生活の喜怒哀楽を詠みこんでいる。これは俳句においても短歌の場合とほとんど変わらなかったのではなからうか。

8. 第一期（第1集～第6集）長老・指導者層の句

最後に台北俳句会の中で指導的な立場にあったと思われる人々、すなわち巫永福・郭水潭のように、黄靈芝とは年齢的にも15～20歳年上の、日本統治期からの文芸家でいわば「長老」ともいうべき人々と、年齢的には2歳しか違わないが、戦前期からの短歌の経験があり、台北俳句会のいわば生みの親になった台北歌壇の主宰・呉建堂の作品とを比べてみよう。

8-1) 第一期長老・指導層の句：巫永福

1913年生れ、2008年没。第1集から第25集まで投句。戦前期からの代表的歌人というより、張文環と台湾最初の文芸誌『フォルモサ』を創刊するなど台湾文学の世界で名を成してきた著名な文芸家の一人で、年齢的にも長老的存在だった¹⁶⁾。『台北俳句集』の表紙題字は、第1集から第4集まで彼の筆により、署名を伴っている。最初の一時期黄靈芝よ

りも重きをなしていたように思われる。

第1集の巫の句はやはり短歌の上の句を思わせるような句が少なくないが、『七彩』に載った句が多いためか、それほど見劣りはしない。第2句は『七彩』で特選になっている。

吉祥の文字に明るく年迎ふ
師走風潮騒のごと吹き抜けり
ナルシスの由紀夫なりしか美化の冬
旅にして四月の陽落つる馬公海
「金閣寺」読みて擱きけり冬ごもり

だが第2集は説明的な句が多く、第1集よりも冴えない感じがする。

樹の下に空手練習元日も
弥勒仏や笑ふばかりが春の日か
落花生かつぐ夫婦の足の泥
門神を拝む家族の除夜そろふ

第2集での「はじめに」で、俳句経験の乏しい「拙い句」も多いが、記録のため収録したという言い方をしているのは、巫永福・郭水潭・呂鵠城など戦前期からの歌歴や俳歴のある人たちは、穏やかならぬものを感じたかもしれない。

第3集・第4集の巫永福の句も気楽に身の雑事を詠んでいる。説明的な句が多く、短歌の上の句のような詠みぶりである。

酒席にてはづむ元旦拳比ぶ
変動の幣価を忘れ山笑ふ
四月馬鹿ならざる馬鹿や康成死（川端康成）
亡母のごと妻はチマキを作りけり（以上第3集）
乾隆の春日もかくや閑帝廟
春空は晴のち雨と子の不満
蚊を打てばテラスに街のともりけり
竜山寺出でしみくじは吉の冬（以上第4集）

黄霊芝が厳しく批判した問題の第5集の句はどうか。

初旅路鳥も波越ゆ馬公海
受診待つ歯科医の窓に蛙聞く
さざなみやなぎさに蟹の孤独なる
年の市母を見うせし子の泣けり

黄霊芝のいう「俳句のリズムや語呂に甘えた」句とは、こういう句を指すのかもしれない。黄霊芝の批判の対象は、ひょっとすると会員全般というより、むしろ巫永福のような「長老」に対して向けられたものではなかったか、とさえ思われる。

第6集も依然として説明的な調子を抜けていないように思われる。

土地公の廟に幾度春来しや
百歩蛇*の寒きにとぐろ動かざる
霧晴る庭木の目白鳴きて去る
粽結ふ妻のひたひに汗にじむ

これらの句は写生といえは写生句であるが、言葉遣いは説明的であろう。自足した人のゆとりの感じはあるが、やはり「甘い句」になっているのではなからうか。

8- (2) 第一期長老・指導者層の句：郭水潭

1908年生れで当時台北俳句会随一の年長者。第1集から第6集まで投句（第2集休詠）。巫永福と並ぶ著名文芸家だが、第一期のみの参加で、第7集以降は句会を去っている。日本統治期1933年頃から短歌を始め、樋詰正治の『あらたま』に属し、陳奇雲・鄭嶺秋と並ぶ歌人とされた。戦後中文になじめず、高橋郁子の誘いで、「からたち」「をだまき」により作歌再開。台北歌壇の発足時は顧問格で活躍している¹⁷⁾。第1集では『七彩』掲載句が全20句中12句と最も多く、巫永福よりはこなれた句を詠んでいるように見える。

春灯の巧みを競ふ寺祭り

波のごと風の中なる花菜畑
夕涼み荔枝食みつつ星数ふ
樹ゆする風も負債の年の暮

しかしこの後、第2集は休詠している上、第3集には14句しか出して
いない。内12句が人事句だが佳句が少ない。そもそも俳句に力を入
れていない感じがする。第4集も12句しか出してない。うち10句が
人事句。やはり気楽な詠みぶりである。

わがために寒卵焼く妻の笑み
よき位置にかけて見なおす初暦
夏に入る干場に目立つ薄布団
市に出す筍洗ふ村娘（以上第3集）
冬眠ですべて静かな蓮池
懐手で黙礼返す威厳かな
たまさかに焼芋食べて里恋し
重陽節詩人つどひて古句銜ふ（以上第4集）

第5集は、一応20句出しているが、人事句が17句。第1・2句は一
字空けがあるが、切れていない。後の句はまさに説明で、季重なりの句
もある。

年賀人 派手着揃ひで往来絶えず
散水車 王者のごとく街廻る
メーデーのあっけなく過ぎて五月晴
月餅を贈りまた貰ふ世事せはし

第6集はまた14句しか投句していない。相変わらず気楽な詠みぶり
である。歌人もであり、当時としては高齢の70歳に近い上、妻の病気
などもあって、俳句には力が入らなかったのかもしれない。

川沿ひの森夕焼けて燕鳴く
相思樹の花に見とれて恋心

夕ぐれや紋黄蝶のかすみ飛ぶ
底冷えに座禅おぼえて堪え忍ぶ

この前後に詠まれたと思われる次のような郭の歌がある¹⁸⁾。

とりどりの草花寄せて手すさびの一坪園芸形をなしぬ
親の弾く胡弓の調べに節合せいたけなる娘民謡唄ふ

どちらも説明調である。これは郭の俳句にも通ずるのではないか。敢えて言えば、巫や郭ら文人たちは何か自分の経験や実力を過信してか、適当に詠んでいるような印象を受ける。実際に名指しはしないけれども、黄靈芝はそこを指摘しなかったのかもしれない。そう考えると、第1集から第6集までの「はじめに」の変化がより納得できるように思われる。

8 - (3) 第一期長老・指導者層の句：吳建堂

1926年生れ、1998年没。第25集まで投句し、第26～28集の3集にわたって遺稿がある。黄靈芝の2歳年長に過ぎないが、台北歌壇（当時）主宰としての影響力は大きかった。台北俳句集では本名に「孤蓬」（蓬は第8集以降竹冠）の筆名を併記していることが多いが、台北歌壇では孤蓬万里の筆名を使用。『台湾万葉集』・同続編及び『孤蓬万里半世紀』のほか著書多数。戦前期に短歌の経験はあるが、巫永福・郭水潭らのような意味での文芸家とはいえないだろう。

第1集は20句中17句と、圧倒的に人事句が多い、というより呉の句には人事に無関係の句が事実上ないといってよい。

喪の家に声なく揺る藤の花
東風吹いて癌にあらざと破顔する
博士号とれた途端に秋を知る
三毛猫を膝に碁を打つ小春かな

第2・3句は東早苗訪台の折国際ホテルで詠んだ、台北俳句会誕生以前の句である。短歌の上の句のような気楽な詠みぶりであるが、句想は豊かである。医者としての生活の一端が到る所に出ている。台北俳句会

を立ち上げた最大の功労者であり、後に川柳会の創立にも参加したが、本命は短歌と割り切っていたという。

第2集も、あくまで短歌が主、俳句は従と心得ているためか、反って気楽で達者な詠みぶりを示す。

休診の札をかかげて木の実植う
春雷や暫し休むる聴診器
菜の花やちらりと見えし泣きぼくろ
薫風やミニの娘二人呵々笑ひ
水澄めり今日は二つの喪を見舞ふ

第3集は再び人事17句。この集より雅号（孤蓬）を併記している。短歌的だが、社会性のある句を二、三詠んでいる。しかし俳句で「芸術の階を登る」などという意識が、果たして呉にあったらうか。

ベトナムに和談の成りて山笑ふ
明月や何時なむ戦のなき日来る
中東にいくさ再び秋暑し
病む友の肩に重げな蒲団掛く

第4集は人事句15句以上。句の構成は依然短歌的なことが多いが、内容で救われている。やはり社会性のある句に新鮮さがあり、魅力を感じる。「文学作品」かどうか、など気にしなかったのではないか。

青年節教へ子剣に優勝す
争ひの絶えぬ国連原爆忌
ニクソンも田中も果てて冬に入る
風邪引きてマスクかけつつ風邪を診る

第5集は人事16句以上で相変わらず多い。句の幅が広い。自然を詠んでも人間ほさが出て来る点が呉の句の魅力であろう。第5句は1992年の横井庄一、1994年の小野田寛郎など、この当時話題になった太平洋戦争時の南方残存兵の出現を詠んだものだろう。第6集でもあらゆる

句に人間を感じさせる。

雷や離れし^{つが}番^まひ^ま再た^ま寄りぬ
諸事多端重陽巡り来亡父想ふ
淋しいと云うてはくれぬ秋の風
ジャングルに尚兵ありや去年今年（以上第5集）
思ひ出のあれこれ棄つる大掃除
春愁や臺たちすぎし娘の嫁かず
極柑*の一つしのばせ海越ゆる
人呪ふ形に大根干されあり（以上第6集）

8 - (4) 第一期長老・指導者層の句：黄靈芝

最後に会長・黄靈芝の句を見てみよう。1928年台南生れ、2016年没。第1集を見ると、緻密な用語法と、行き届いた構成で、繊細な感じの句が多い。

嬉々と蜂花圃に散り行く陽の恵み
春野広し無頼の豚を追ふ農婦
抜歯して何うつろなる年の暮
蚊遣りして女後妻の座に寧し

他の投句者に多い自己や身邊の些事に拘泥した詠みかたをしていない。この点で他の会員の句とは明らかに違った独特の味わいを持っている。黄靈芝は巫永福や郭水潭あるいは呉建堂らとは対照的に、始めから本来の俳句を目指していた¹⁹⁾。第2集の句も微妙な用語法が目につく。

うららかや牧場の婆のウ音便
菖蒲濃し喪中若さを裾に秘め
落花生熟れて良縁野にしきり
寡婦と云ふ一語に耐へて葱刻む

4句とも『七彩』に採られた句である。黄は『七彩』に1972年7月

号まで投句していた（他のメンバーはその前にほとんど投句を止めてしまったが）。句会としては「七彩から独立したい」と言っていたのに、一方では『七彩』に投句を続けている。『七彩』を退会する意向を伝えた会員への手紙で「たとえ東先生の人格がどうであろうと、私は彼女の俳句作品の文学性を高く評価するものであります」と言っていた黄靈芝の、芸術性へのこだわりを見ることができよう²⁰⁾。

第3集でも緻密な用語法と句想の巧みさが見られる。

影を漕ぐ鞦韆天と地の間に
亡き父と居れば城址のかげろへる
炎昼の一樹己の影の中
妻へ妻戻す遠雷川遊び

第4集・第5集・第6集の句は意表を突く付きで詩情を搔きたてる句が目立つ。また他の会員の句が自分を露出している句が多いのに、己を無にしてもものに語らせる感じがする。「婚訊」「鳳樹」など凝縮した漢語句を使用したり、独特のユーモアも見られる。

媽祖の炉主たりゐて不肖児にあらず
晩春を門に閉ざして兵ら留守
蓑虫の孤独何時より遠祭
人の計や俄かに動く鯛雲（以上第4集）
婚訊のしきりに南都鳳樹咲き
潮騒に遠き盃の夫婦蟹
雲とんで飛魚市に夢見がち
叔母去りて一代果てぬ冬の星（以上第5集）
元日を秘色^{ひそく}一つに長話
紋黄蝶追へば修道女も乙女
此岸また蜻蛉に隠しき築の杭
喪の家の犬にも齡遠もがり（以上第6集）

黄靈芝もこの当時は短歌も詠んでいたが、彼の歌は他の会員の作品とは一味もふた味も違っていった。前回でも紹介したが、孤蓬万里（呉建

堂)はつぎのような二首を例に挙げている。その諧謔と風刺の利いた詠いぶりに、歌会で披露すると爆笑が沸きあがったという²¹⁾。

通世も易きに非ず高僧が帳簿を抱へ税務署に行く
野良猫に餌をやりしが運のつき、子をひきつれて遷り来るとは

次のような歌も同様であろう。

諍ひて割りたる皿を掃き居れば詫ぶるが如く犬の寄り来る
月曜は天下些か緩み居て給仕一人がまともなる役所

呉建堂は「歌人は……ふつうの人には見えない物を見いだす目を持ち、他人には表せない表現を導き出す《うで》をもたねばならぬ」が、黄靈芝は「感動を表現する一種の^{うで}技」をもっているとしている。さらにいえば黄靈芝の短歌には、切れがあり、微妙な付きになっている歌が多い。俳句の作法とも通ずるものがあるのではなかろうか。

9. まとめ

『台北俳句集』第1集～第6集の「はじめに」は黄靈芝が会員の句の質にきわめて神経質であったことを示している。しかし詩人は「指物師が刃物を研いでおくように、終始、神経を尖らせて」いなければならぬという黄靈芝の要求に、多くの会員はなかなか付いていけなかったように思われる。黄靈芝の期待と会員の投句との間にはかなりずれがあったであろうことは確かである。

黄靈芝は「文学作品」としての俳句を求めるのに対して、多くの会員は短歌の上の句のような句を詠んでいたといえよう。題材も短歌と同じように、俳句にもやはり身近な生活を詠みこむことが多い。人事句が多くなるのもそのためであろう。そこに『雲母』で鍛えられた黄靈芝の期待とのずれがひそんでいた可能性がある。また多くの会員は、その句や歌にも見られるように、歌会や俳句会を通じての交わりを楽しんでいた。社会的・世代的に浮き上がりがちな「日本語人」世代の人々にとってかけがえのない交流の機会であった。そこにも黄靈芝の期待と会員の期待

とがずれる原因があったと思われる。

いずれにせよ台北俳句会第一期の段階で、黄靈芝が優れた俳人であることは誰もが認めるようになっていたであろう。会員の作品一般に厳しい批判をしたこともその裏付けがあつてのことであろう。前にも触れたが、『台北俳句集』の表紙の題字は、第4集まで巫永福の自署入りの筆だったのが、第5集からは黄靈芝の自署なしの筆に換わっている（同時にそれまで「臺北」だったが以後「台北」になっている）。これは黄靈芝が名実ともに「主宰」となったことを象徴しているように思われる（実際には「会長」と呼んでいたが）。その一方で黄は、会員に頼まれても面と向かって批評や指導をしようとしなかったほど「遠慮深かった」ともいわれている。これは長老・先輩文芸家に対する遠慮があつたためかもしれない。

第二期に入ると、第7集から「はじめに」が「あとがき」に換わる。そして俳句のレベル向上の問題は新たな展開をするようになる。

(未完)

註

- 1) 「会員だより」『七彩』1971年3月号。
- 2) 高橋郁子「東早苗女史をお迎えて」『七彩』1974年2月号。
- 3) 辻野房子がこれに当る。陳黄候鳥（黄靈芝の次姉）は短歌に関する情報が見当たらないので、「純粹の」俳句系だったかもしれない。
- 4) 最近の状況を見ると、『台湾歌壇創立五十周年記念号』（2017年4月）に台湾歌壇の現会員（日本人を含む99人）として詠草を寄せている台北俳句会員が8人いる。他に日本人1人を含む元会員4人の作品が載せられている。
- 5) 2016年7月現在第43集まで刊行されているが、第41集（中華民国100年度）・42集（同101年度）・43集（同103年度）は、2015年7月に三年度分一括刊行で、編集者は黄靈芝ではなく「台北俳句集編輯委員会」である。なお別に2010年12月『台北俳句会四十周年記念集』が刊行されているが、これは事実上の第40集に相当するとみられる。
- 6) 孤蓬万里編著『台湾万葉集・続編』集英社、1995年、412-418頁。
- 7) 同『台湾万葉集・続編』61-65頁。
- 8) 孤蓬万里編著『台湾万葉集』集英社、1994年、246-253頁。なお『七彩』1971年7月号に蕭慶賢の「歌集紹介」の記事がある。
- 9) 前掲『台湾万葉集・続編』282-288頁。
- 10) 同『台湾万葉集・続編』の歌歴紹介によれば、京都女子医専卒。戦後台

湾人医師范如霖と日本で結婚、1959年台湾に移る。1967年「からたち」入会、後に高橋郁子の紹介で「コスモス」に移り、台北支部に属す。台北歌壇には創立当初より参加している。

- 11) 拙論「戦後台湾俳句小史」(一)、『成城文藝』第239号、(25)62頁参照。
- 12) 頼天河「川柳との縁」、今川乱魚編『李琢玉川柳集・酔牛』新葉館出版、2006年、147頁。
- 13) 前掲『台湾万葉集・続編』256頁。
- 14) 同『台湾万葉集・続編』144-149頁。
- 15) 同『台湾万葉集・続編』241-247頁。
- 16) 巫永福は南投県埔里小学校に学び、霧社事件の花岡二郎と同級生。中学時代名古屋に移り、明治大学入学、張文環らと台湾芸術研究会を結成、会誌『フォルモサ』を創刊。張文環が帰台して『台湾文学』を創刊すると直ちにこれに参加。日本統治期最後の文学運動に寄与した。戦後は「からたち」に参加、台北支部長となり、台北歌壇発足時には顧問格として助成。「をだまき」「笠」「台湾文芸」などにも参加ないし関与している。同『台湾万葉集・続編』99-103頁。
- 17) 同『台湾万葉集・続編』42-48頁。『七彩』1971年3月号の「会員だより」では東早苗への年賀状に応える形で、「……こちらで句会をやることにきまり、既に通知をもらいました。こんどは万難を排しても出席し、皆と共に俳句を勉強するつもりでおります。……これから七彩の台北支部に参加し、文学運動の一翼として働くつもりです」と抱負を述べている。いささか気負い過ぎの感なしとしない。
- 18) 前掲『台湾万葉集』47頁。
- 19) 黄靈芝はこの第1集の刊行(民国60年10月10日)の十日前(民国60年10月1日)に刊行された『黄靈芝作品集 2』の「俳句」の部に、既にこれらの句を掲載しているのである(第一句の「旭」は同義の「暎」になっている)。この作品集は「俳句」「短歌」「詩」からなっているが、そのうち「俳句」は春・夏・秋・冬の四部に別れ、計340句を載せている。『雲母』に投句していたころから詠み貯めたものであろうか。「詩」に対する執念を感じさせる。
- 20) 第3集と第4集では黄靈芝(鳳春菁)と別の雅号を併記している。しかしこの「鳳春菁」という雅号をそれ以後は使用していない。もともと靈芝が雅号だから、「黄靈芝」(黄天驥)と本名を併記する方が自然であろう。
- 21) 前掲『台湾万葉集・続編』385-387頁。